

1.4 医学専門学群

学生の確保 (人)	年次	定員	志願者	受験者	合格者	入学者		
	1年次	95 -	513 -	513 -	96 -	95 -		
	(95)	(522)	(522)	(95)	(95)			
編入学・再入学	5 -	46 -	46 -	7 -	5 -			
	(5)	(123)	(128)	(5)	(5)			
学生の進路 (人)	卒業者	就職者	就職者の内訳			研修医	進学者	その他
			企業	教員	公務員			
	101 -	-	-	-	-	95 -	2 -	4 -
(99)	(-)	(-)	(-)	(-)	(92)	(4)	(3)	

・()は前年度の数値を， は外国人留学生を内数で示す。

1 医学専門学群の活動

【教育】

1年次における「人間学入門」に加え、本年度新たに3年次「遺伝性疾患」「院内感染コントロール」「EBM (Evidence Based Medicine)」および4年次「循環器コース」においてテュートリアル方式による少人数教育を取り入れた。さらに、今後のテュートリアル教育の本格的な導入のため、10室のセミナールームの教育環境整備を行った。また、ファカルティ・デベロップメントのためのワークショップを6回開催した。

能率的に基礎医学実習を行うために、多目的実習室を形態系専門実習室に改装した。

臨床実習を行うための知識と技能・態度を評価するために4年次にCBT (Computer Based Testing: 共用試験)の試行を、4年次と6年次にOSCE(客観的臨床能力試験)を行った。また、近い将来に予定されているCBTの本格的実施に対応するために、55台のコンピューターとそのネットワークを整備した。

診療参加型の臨床実習を充実するためには、臨床実習開始前の教育にシミュレーターを用いた臨床技能開発システムの構築が必要とされる。本年度、文部科学省よりシミュレーター購入予算が措置されたため、一部の講義室を改装し、当該システムによる実習用のスキルスラボを設けた。

学群教育課程委員会の下に医学教育改革委員会を設置し、23回の会議を開催し、平成16年度からのカリキュラムの抜本的な改革のための基本案を策定した。

【学生生活】

本年度も1年次生の学習指導には特に力を入れ、1学期はフレッシュマン・セミナーを行い、多面的な学生指導を行った。4月に上級生主催で行われた新入生歓迎の合宿には、学群長及び副学群長とともに1年次生のクラス担任も参加し、学生と教官、学生相互の交流を図った。また、各学年とも各学期の始めや必要時に、クラス担任によるテュートリング(個別指導)を行った。また、本年度はクラス連絡会を2回開催し、学生側の意見、要望やカリキュラム改革等について意見の交換が行われた。

医学食堂の改装や学生利用スペースのアメニティー向上のための施設整備を行ったが、案の作成には学生が主体的に関わった。

2 教員の教育業績評価の状況

医学教育評価WGを設置し、学生の授業評価、教官の自己評価および同僚の授業評価を軸とする教官の教育評価の体系的な導入のための実施案について検討し、中間報告をまとめた。

昨年度と同様に、学生全員に講義・実習についてアンケート調査を実施し、その結果をカリキュラム編成の参考にするとともに、各授業担当教官に知らせ、教育方法の改善に供した。

3 自己評価と課題

平成16年度実施予定の新カリキュラムでは、テュートリアル教育の拡大、参加型の臨床研修であるクリニカルクラークシップ、選択制の大幅な導入を骨子とする。その内、テュートリアル教育の本格的な導入のためには、多数の小部屋が必要であり、そのためのさらなる施設整備が不可欠である。また、これまで大教室における講義中心の授業を行ってきた教官の意識改革が必要であり、そのためのファカルティ・デベロップメント(FD)をより充実させる必要がある。また、新カリキュラムでは、これまでの1年次の基礎科目、専門基礎科目の大幅な見直しが見込まれている。改革案に沿った具体的なカリキュラム作成作業が次年度の重要事項になる。

本年度新たに設けた学群スキルスラボは、将来、医学類の学生のみではなく、看護・医療科学類の学生、卒後の臨床研修生、レジデント、院外の教育協力病院や研修指定病院の関係者等の自主学習にも利用される。そのため、各種シミュレーターの一層の整備とともに病院内の臨床技能実習室との有機的な連携が必須である。今後、卒前卒後の一貫した臨床教育システムの構築が課題となる。

平成14年度医師国家試験の合格率は、94.3%(全国平均90.8%)であった。成績不良者に対する指導や医師としての不適格者についての早期進路指導などを一層徹底する必要がある。